

令和 年度 福島大学基金研究推進事業助成による成果報告書

2025 年 10 月 15 日

学 長 殿

所属部局・職名

(所属・学年) 教職大学院・院生

申請者名

(学会発表助成の場合は参加者名)

脇坂 茉里

<p>助成の区分 (該当するものに○)</p>	<p>学会発表助成・学術出版助成・学術論文発表助成</p>
<p>研究活動名</p>	<p>日本特殊教育学会第 63 回大会</p>
<p>成果の概要</p>	<p>本報告では、「児童の“伝えたい”を育てる国語科授業づくり」をテーマとし、知的障害特別支援学校小学部における国語科授業の実践、その成果と課題について報告を行った。小学部における国語科授業の構築にあたり、児童の「伝え合う力」の育成を目標に有効な手立てについて検討し、実践を重ねた。その結果、知的障害のある児童が自分の考えを効果的に伝え合うためには、情報の理解と整理が不可欠であることが明らかになった。具体的には、視覚的な教材の活用、具体物の操作、そして書くことで考えを整理するなどの手立てや活動が有効であるとの結果が得られた。これらの結果に基づき、知的障害のある児童が自らの考えを意欲的にできるよう、適切な手立ての工夫と加え、「書くこと」を学習活動に取り入れていくことの重要性を確認した。</p> <p>指定討論では、聖学院大学の渡邊孝継先生より、「言語能力の確実な育成の効果と学習に向かう構えの作り方」についてお話をいただいた。先生からは、「課題が達成された時の聞き手の先生・子どもたちの反応」、「日常生活の伝達場面における変化」の 2 点について質問があった。これらの質問は、今後の授業実践を深化させる上で重要な視点となった。単に授業内容を構築するだけでなく、授業における児童の具体的な反応を丁寧に観察し、その学びが日常生活の伝達場面にどのように汎化・活用されているのかを検証していくことの重要性を再認識する機会となった。</p> <p>今回の自主シンポジウムでの学びを踏まえ、今後はこれまでの授業の分析・検証をより丁寧に進めていきたい。特に、指定討論で示された「聞き手の反応」や「日常生活での変化」に焦点を当て、授業記録や児童の表現などを多角的に分析していく。これらを通じて、児童の「伝えたい」という意欲や表現の変化、他者との相互作用からの変容について明らかにし、知的障害のある児童の特性に応じた指導や手立ての改善、より効果的な国語科の授業づくりへと発展させていきたい。</p>